

京王プラザホテル（東京）、2022.7.28-29

アルゴリズムを用いた形態動態学的評価は単一胚盤胞移植の妊娠成立までの移植回数に影響を及ぼすのか

入江真奈美<sup>1</sup> 水野里志<sup>1</sup> 福田愛作<sup>1</sup> 森本義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IIVF 大阪クリニック

<sup>2</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

### 【目的】

体外受精において、妊娠に結びつく胚を確実に選択できれば胚移植の回数を減らし妊娠成立までの期間を短くすることができる。このため、有用な胚評価は、妊娠成立までの胚移植の回数を少なくできる評価である。近年、タイムラプスによる形態動態学的評価が胚評価に用いられるようになった。今回我々は、形態動態学的評価の一つである Eeva™ による胚評価の有効性を検証するために、形態学評価を用いた場合と、妊娠成立までの胚移植回数を比較した。

### 【方法】

2019 年 3 月から 2020 年 12 月に、初回採卵で採卵決定時の E2 値が 1500 pg/ml 以上、胚盤胞で全胚凍結を予定した 224 症例を対象とした。使用するインキュベータを無作為に振り分け（タイムラプスインキュベータ：Geri、G 群、ドライインキュベータ、D 群）、G 群はガードナーの分類に Eeva™ を加味し、D 群はガードナーの分類のみで胚の優先順位を決定後、胚凍結を行った。融解単一胚盤胞胚移植後、臨床妊娠が成立した 168 症例（G 群：77 症例、D 群：91 症例）について、初回の胚移植で臨床妊娠が成立した症例の割合、累積の臨床妊娠率が 90%以上になった胚移植の回数、平均移植回数、臨床妊娠成立までに要した最多の移植回数を両群間で比較した。

### 【結果】

それぞれの群において初回の胚移植で臨床妊娠に至った症例の割合は G 群 71.4%(55/77)、D 群 71.4%(65/91)であり、累積臨床妊娠率が 90%以上になる移植回数は両群とも移植 2 回目であった。臨床妊娠成立までの平均移植回数は G 群  $1.42 \pm 0.78$  回、D 群  $1.44 \pm 0.88$  回で有意差は認められなかった( $p > 0.05$ )。また、臨床妊娠成立までに要した最多の移植回数は G 群で 4 回、D 群で 6 回であった。

### 【考察】

Eeva™ のアルゴリズムを用いた胚評価を行っても臨床妊娠成立までの移植回数は減少しなかった。胚盤胞の評価においては形態学的評価で十分胚を選択できており、Eeva™ による胚評価の有効性は確認できなかった。胚盤胞評価には、タイムラプスでの培養の必要性は低いと考えられる。